

C. Stone in Micronesica 6: 523 (1970)——  
*Bacopa dianthera* (SW.) Descole & Borsini:  
 Corner & Watanabe, II. Guide Trop. Pl.: 797,  
 fig. (1969).  
 Hab. Isls. Bonin, Chichizima, Okumura (F.

Nobeshima, March 30, 1998, TI).

This species is a newly naturalized plant in  
 the Bonin Islands.

(東京都中野区 [REDACTED])

新帰化植物、オオヤナギアザミ（新称）福島県いわき市から見つかる（門田裕一）  
 Yuichi KADOTA: *Cirsium hupehense* Pamp. Newly Naturalized in Iwaki, Central Japan

1997年11月、福島県いわき市で、アザミ属ヤナギアザミ節 *Cirsium* sect. *Spaniopitton* (Less.) C. Shih に所属する植物が見つかった (Fig. 1, A-D). この植物は頭花が大型で直立して開花し (Fig. 1, B), 総苞片が9列、内総苞片および中総苞片の付属体が扇状に広がって大きく (Fig. 1, C), また高さが2mと全体的に大型である点でヤナギアザミとは異なっている。検討の結果、この植物は *Cirsium hupehense* Pamp. であることが明らかとなつた。*Cirsium hupehense* は中国原産の植物で、次のような経緯で福島県いわき市に帰化したあるいは帰化しつつあるものと考えられる。この植物はこれまで日本には知られておらず、ヤナギアザミに似て大型であるところから、オオヤナギアザミと新称する。

日本産アザミ属植物の分類学的研究の一環として、日本各地で現地調査を行うとともに、現地に在住する研究者に調査への協力を依頼してきた。そのような呼びかけに答えて現地調査を実施していただいた方々の中の、いわき市の深澤榮子氏と紺野七美子氏、谷平雅子氏がいわき市川前町小久田（おぎゅうだ）林道でオオヤナギアザミを発見された。1997年11月に発見されて以来1998年10月までの約1年間、深澤氏らによって調査が実施されてきたが、結局最初の発見地である小久田林道でしか見いだすことができなかつた。しかもこれまでに発見されたのは最初の1個体のみである。さらにこの1個体は染色体観察と系統保存のために掘り取ったので、現地にはもう存在しない可能性もある。掘り取った個体は草刈りのため上部が失われており、未開花の状態であった。しかし、1997年にはこの個体は稔性があると思われる充実し

た瘦果をつけていたので、この個体のほかにも自生している可能性が高い。

オオヤナギアザミはいわき市川前町・小久田林道の側溝に生育していた。この林道は東京電力いわき営業所が管轄する林道で、1995年に完成されたものである。林道の法面にはコマツナギなどが生育しているが、これは同年に行われた外国産種子の吹き付けによるものであることが分かっている。吹き付けに用いられた種子を輸入した業者によると、この種子は中国・北京近郊から採取されたものであるという。問題のオオヤナギアザミの瘦果はこの吹き付け用の種子の中に混入していた可能性が高い。このことは、同じ林道沿いにヒナヒゴタイ *Saussurea japonica* が採集されていることからも裏付けられると考えられる。ヒナヒゴタイは日本では九州にしか知られていないが、中国では東北地方から華南まで広く分布している（中国高等植物図鑑第4冊、科学出版社、北京、1975）。

1997年11月に採集された個体、E. Fukazawa 97005 (TNS) は高さ2mを越えていた。1998年10月に掘り取った根はヤナギアザミ節に特徴的な直根で (Fig. 1, D), 長さ20cm, 最も太い箇所で直径2cmに達していた。吹き付け用の種子の中にアザミの根が混入することは考えにくいので、1995年に吹き付けられてから3年間で、茎の高さ2m、根の長さ20cm、太さ2cmに生育を遂げたことになる。これまでの状況証拠から、いわき市のオオヤナギアザミは帰化植物である可能性が極めて高いため、帰化植物の定着と成長の速さの記録としてここに報告しておきたい。

オオヤナギアザミの染色体数は  $2n = 28$  (Fig. 2) で、ヤナギアザミ *C. chinense* Gardn.

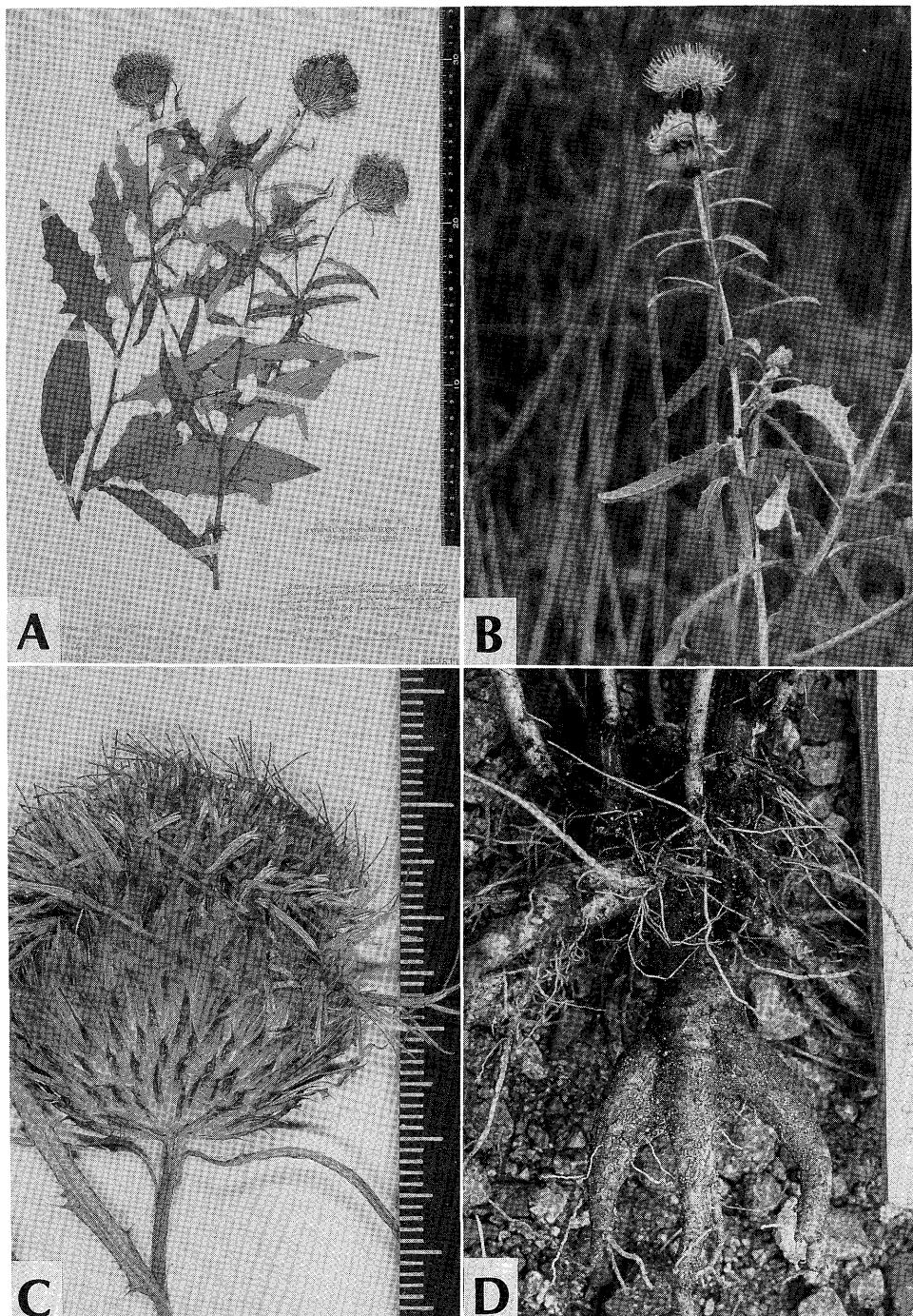


Fig. 1. *Cirsium hupehense* collected from Iwaki, central Japan. A. General habit. B. Erect capitula. Photograph was taken on 28 Nov. 1997 by Ms. E. Fukazawa at Ogyuwa, Iwaki, Fukushima, central Japan. C. An involucre. Note middle and inner phyllaries with prominent fan-shaped appendages. D. Stout, well branched and erect root, ca. 2 cm in diameter at basal part. A-D: E. Fukazawa 97005 (TNS).

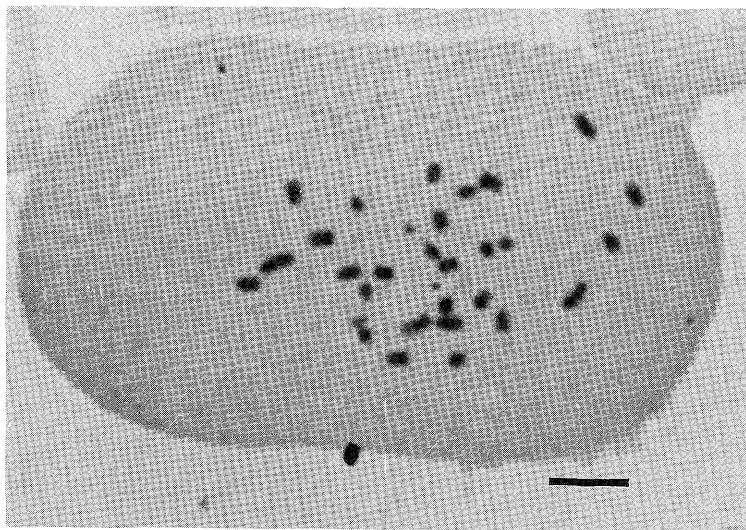


Fig. 2. Somatic chromosomes of *Cirsium hupehense* ( $2n = 28$ ). Scale bar: 10  $\mu\text{m}$ . Photograph was taken by Dr. Goro Kokubugata, Tsukuba Botanical Garden, National Science Museum.

& Champ. (in Hook. Kew J. Bot. 1: 323, 1849) [= *C. lineare* (Thunb.) Sch.-Bip. in Linnaea 19: 335, 1847, syn. nov.] が  $2n = 28$  (Arano, Bot. Mag. Tokyo 76: 219–224, 1963) であることとよく一致する。オオヤナギアザミの染色体数についてはこれが初めての報告となる。ヤナギアザミ節は、総苞の中片と内片に発達した付属体をもつこと、直立する根をもつこと、そして染色体数が  $2n = 28$  であることで特徴付けられる、東アジアに固有のよくまとまつたグループである。

中国植物誌第78卷第1分冊(1987)によると、オオヤナギアザミは華北、華中、華南など中国に広く分布すると記されている。中国科学院植物研究所(PE)での標本調査の結果、オオヤナギアザミの標本は多数収蔵されていたが、主に産地は華北に集中していること、そして北京近郊から採集されたものは1枚もないことが明らかになった。植物研究所の陳 藏林教授にこのことを尋ねたところ、北京近郊では見かけないという返事であった。「北京近郊で」採取したという吹き付け用の種子の中に、どのような経緯でオオヤナギアザミの瘦果が混入したのかという点については不明な点が多い。

福島県いわき市でオオヤナギアザミの徹底的な調査をしていただいた深澤栄子氏、紺野七美氏、谷平雅子氏に深く感謝します。国立科学博物館筑波実験植物園の國府方吾郎博士にはオオヤナギアザミの染色体の観察と写真撮影をしていただきました。また、中国科学院植物研究所の陳 藏林教授にはオオヤナギアザミに関して貴重なご意見を賜りました。中国科学院植物研究所(北京)でのアザミ属植物の標本調査は、日本学術振興会の平成10年度特定国派遣事業によって行われました。ここに期して感謝の意を表します。

*Cirsium hupehense* Pamp. in Nuov. Giorn. Bot. Ital. 18: 86 (1911)–C. Shih in Acta Phytotax. Sin. 22: 448 (1984); Fl. Reipub. Pop. Sin. 78 (1): 121 (1987).

Hab. JAPAN; Honshu, Fukushima Pref., Iwaki-shi, Kawamae-machi, Ogyuwda, alt. 600 m, 28 Nov. 1997, E. Fukazawa 97005 (TNS 652811–Figs. 1, A, C; TNS 651812).

Chromosome number:  $2n = 28$  (Fig. 2).

(国立科学博物館植物研究部)